ISSN 0917－4729

北方民族博物館だより

No.85

H7.27　魚骨装飾付き魚皮製衣服　1995年　84.0cm　ナーナイ　ロシア／ハバロフスク地方アチャン村）

30匹ほどのサケの皮をつなぎ合わせてつくられた、女性用の衣服です。皮はよくなめされ、表面のうろこが完全にとりのぞかれています。また、皮切れの間は密に縫い合わせてあり、遠目には魚皮であることがわからないほどです。魚皮部分の縁は青く染色した魚皮のアップリケで、さらにそのまわりは細かな刺繍模様をほどこした布地で縁取られています。裾まわりの黒い布地には、魚の骨が一つ一つ縫いつけられています。

目次　Contents

1　表紙　魚骨装飾付き魚皮製衣服
2　ロビー展「北方民族素材シリーズ1：目からうろこの魚皮ワールド」
3　講座「フィンランドにおけるサーミ文化の現状と博物館1」／はくぶつかんクラブ「土器作り①」
4　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

ロビー展

北方民族素材シリーズ1：
目からうろこの魚皮（ぎょひ）ワールド

2012.4.28- 6.10

北の海や河川の近くで魚をとって暮らす人びとは、食べること以外にも魚を利用しました。その利用の一つが、魚の皮をつかったものづくりです。本展では、魚の皮を素材としてつくられた生活用具や工芸品、および加工用具や写真など約100点を展示し、アムール川流域・サハリン島・北海道における魚皮利用の文化を紹介しました。

魚皮って、どんな素材？

一般に魚の皮というと、「やぶれやすい」「かたそう」などといったイメージがあるかもしれません。しかし、実は新鮮な魚から剥（は）いだ皮は、多少の力ではやぶけないくらい丈夫です。また、乾いた皮はしっかりともむことで、軽くてやわらかい素材になります。また、布地とちがって水や風を通しにくいことも魚皮の特徴です。

本展では、もむ前の魚皮ともんだ後の魚皮をさわって比べてみることのできる「魚皮をさわってみよう」コーナーを設けました。来場者アンケートでは、「（もんだ後の魚皮が）やわらかくて驚いた」などといった声が寄せられました。

魚皮を着た人びと

上記のような特徴をいかして、魚皮は古くから衣服を作るのに用いられました。とくにアムール川流域に暮らす人びとが、古くから魚皮の服を着ていたことは中国の記録によって知られています。こうした服をつくる技術は、今日のナーナイ（中国領ではホジェン）やウリチなど、おもにアムール川流域の人びとに近年まで受け継がれています。

バラエティに富む、魚皮利用の世界

北方地域を眺め渡すと、魚皮を利用する文化はアムール川流域だけでなく、サハリン島、北海道にかけて広がっているほか、アラスカやカムチャツカ半島などにも見られました。

全体を概観すると、衣服のほかにもさまざまな製品があります。その例としては、地域差がありますが、靴、手袋、かぶりもの、袋類、儀礼用具（楽器やまじない具）、玩具（がんぐ）、ふいご、刀帯、船の帆、家屋の覆いなどが挙げられます。また、魚皮に含まれるにかわ成分も接着剤として利用されました。

魚皮をつかった新たな文化

今日では、北方の各地で魚皮の利用が民族の「伝統」として再評価され、魚皮をつかった工芸品が作られています。こうした創作活動は、かつて日常的に行われた魚皮利用とは異なる、新たな文化を生み出しつつあります。本展では、魚皮自体のもつ色合いを組み合わせて風景を表現した貼り絵、ビーズをあしらった小物入れ、トナカイの毛を縫い付けて飾った巾着袋、携帯電話を入れるポーチなどを紹介しました。

今回ご来場くださった方々には、普段のイメージとは異なる魚皮の特徴や、その利用の多様さと奥深さに、多少なりとも驚いていただけたのではないでしょうか。それこそ、本展のタイトルにこめた狙いです。驚きをきっかけとして、目からうろこが落ちるように新たな視野が開け、身近な資源を豊かな知恵や技術で余すところなく利用した北の人びとの文化に対して関心を深めていただけるように期待しています。

なお、関連事業として5月26日（土）、はくぶつかんクラブ「魚の皮で楽器づくり～ミニ・ヨードプ（がらがら）」を行いました。ウイルタの儀礼用具ヨードプをモデルにしたおもちゃをつくる工程で、魚皮の切り貼りや、もんでやわらかくする作業を体験しました。（学芸員　山田祥子）

（左写真）展示風景
（右写真）魚皮の帆（ナーナイ）。一辺の長さ約2m。アムール地方で獲れたさまざまな魚の皮60～70匹分を縫い合わせてできている。

はくぶつかんクラブ

土器作り①

2012. 5.12
講師　小番　宗幸
（紋別市立博物館　学芸員）

はくぶつかんクラブは、小中学生のみなさんが、北方民族の知恵や技術を体験する場です。今回は、紋別市立博物館の小番（こつがい）宗幸氏を講師に迎え、土器作りの指導をお願いしました。

土器作りの指導をする小番氏

はじめに、およそ1万年以上前の縄文時代の始めごろに土器が作られるようになったという話がありました。この土器の発明によって、それまで焼いたり生で食べていたりしていた食生活に加えて、土器を使って食材を煮て食べたりと、食事のバリエーションが増えていったという土器の歴史の簡単な解説がありました。そして、その後早速土器作りを始めました。

まず、小番氏が事前に準備してくださった粘土の一部をイタドリの葉の上にのせ、親指を粘土の中央に差し込んで凹みを作ります。差し込んだ親指を軸にして、葉の上で粘土を回転させながら少しずつ、厚さが均等になるように凹みを押し広げてゆきました。これで、少し小さめの粘土の器が出来上がります。

次に、別にとっておいた粘土を台の上で転がして粘土のひもをつくり、これを器の上にぐるりと回すように積んでゆきました。これを繰り返しながら、指で形を整え、少しずつ器を大きくしてゆきました。

最後は、一番楽しい模様付けです。器の表面に少し傷をつけ、粘土を水で溶いた「粘土の接着剤」をその上に塗って粘土ひもをつけたり、竹べらや棒、貝殻を押し付けたりと、みなさんさまざまな模様をつけてゆきました。

出来上がった器は、1つとして同じものは無く、みなさんの個性が表れていたと思います。

みなさんが作った器は博物館で預かって乾燥させ、7月21日(土)に野焼きをし、土器に仕上げる予定です。

（学芸員　角　達之助）

講座

フィンランドにおける サーミ文化の現状と博物館1

2012. 5.23
講師　タルモ　ヨンパネン
（シーダ博物館　館長／フィンランド）

北海道大学総合博物館において、当館所蔵資料も展示されている展覧会『北極圏のコミュニケーション　境界を越えるサーミ』（主催：北海道大学グローバルCOEプログラム「境界拠点の形成」、フィンランドセンター北海道事務所）が開催されています。この展覧会の関連事業に来日された、フィンランド・イナリにあるシーダ博物館館長のタルモ・ヨンパネン氏に、当館でも講話を行っていただきました。

サーミは異なる生計手段を組み合わせた狩猟民族で、小規模なトナカイ飼育も行っていました。トナカイ飼育が大規模に行われるようになったのは1600年代になってからのことです。

サーミは現在4カ国にまたがって暮らしています。フィンランドに9000人、スウェーデンに2万5000人、ノルウェーに4万人、ロシアに2000人です。

フィンランドのサーミ地域は四つの自治体に広がっています。このサーミ地域では、義務教育や公的機関はすべてのサービスをサーミ語でも提供しなければなりません。

フィンランドのサーミ語、サーミ文化、サーミの立場を保護するためにサーミ議会が運営されており、サーミ議会は公的機関に対しての指導を行っています。様々な課題がありますが、特にサーミ地域以外でサーミ語や文化をどう守ってゆくのかが重要になってきています。というのは、サーミ地域以外で暮らすサーミの割合が増え、サーミ地域では高齢化が進んでいるからです。

ヨンパネン氏（右）、通訳のウラ・ピルコラ氏（左）

サーミの民族衣装には地域差があり、どのような衣装を着ているのかで、どこの出身かがわかると言います。色よりも装飾がポイントだそうです。ヨンパネン氏は、ご自身の出身であるフィンランド・ウツヨキ地方の衣装を着用されての講話でした。

（学芸主幹　笹倉　いる美）

第27回特別展
「東シベリア・サハ　永久凍土の大地に生きる」

サハの馬乳酒用杯

東シベリアに位置するロシア連邦内の共和国・サハ。その領域の大半は永久凍土に覆われ、特に内陸部は人間が住む土地としては世界でもっとも寒いとされています。しかし、こうした厳しい環境のなかでも、人びとは独自の民族文化を発展させてきました。本展示では、サハ（ヤクート）民族を中心に、サハ共和国に暮らしてきた人びとの文化を紹介します。
〈おもな展示資料〉伝統的衣類・装飾品、毛皮製防寒具、馬乳酒用杯、口琴ほか

■ 会　期　平成24年7月14日（土）～10月14日（日）
■ 会　場　北海道立北方民族博物館　特別展示室
■ 観覧料　一般450（300）円 65歳以上300円 高校生・大学生150（120）円
※（ ）内は10名以上の団体料金（常設展示とのセット割引もあります。）

【関連事業】
◇特別展関連講演会「氷と寒さを利用する文化：サハ人の生活と社会」7/14（土）10:30-12:00
　講師：高倉浩樹氏（東北大学東北アジア研究センター准教授）
◇「展示解説会」7/28（土）、8/11（土）9:30-10:00, 16:00-16:30
◇「東シベリア・サハの楽器・口琴体験＆ミニコンサート」8/25（土）10:00-11:30
　講師・出演：直川礼緒氏（日本口琴協会）、鈴木紀美代氏（ムックリ奏者）
◇講習会「東シベリア・サハの刺繍」8/25（土）13:00-16:00、講師：直川ナディア氏（サハ文化伝承者）
◇講習会「東シベリア・サハの料理」8/26（日）10:00-13:00、講師：直川ナディア氏（サハ文化伝承者）
◇はくぶつかんクラブ「シベリア風ぎょうざ・ペリメニを作ろう！」9/22（土）10:00-12:00
◇講座「地球温暖化とトナカイ牧畜民」9/23（日）10:30-12:00、講師：中田篤（当館主任学芸員）

INFORMATION

開催中！
◆ 6月16日（土）～7月1日（日）、当館ロビーにて「オホーツクの工芸織物編」（観覧無料）を開催しています。オホーツク管内で織物を楽しんでいる皆さんの作品をご紹介しています。

移動展
◆ 4月23日（月）～5月18日（金）、北海道大学ファカルティハウス「エンレイソウ」ギャラリー（札幌市）にて、同学文学研究科北方研究教育センターとの共催で、写真展「北にくらす子どもたち」が開催されました。

行事報告
◆ 5月4日（木）、5日（金）に、当館ホールにてGW企画「ころころフェルトボールのストラップ」を行いました。羊毛からフェルトボールをつくり、つなげて右の写真のようなストラップにしました。

◆ 5日19日（土）に、施設見学会「はじめての北方民族博物館＆道立オホーツク公園」を行いました。

◆ 6月16日（土）に、講座「クマ送りと海獣送り」（講師：当館・渡部裕学芸員）を行いました。

◆ 6月23日（土）に、はくぶつかんクラブ「毛糸を織って北欧サミ風キーホルダーを作ろう」（講師：当館・菅原章子解説員）を行いました。

◆ 6月23日（土）に、道立オホーツク公園にて「ユハンヌス～フィンランドの夏至祭り」（フィンランドセンター北海道事務所、道立オホーツク公園共催）を行いました。

職員の異動
［採用］
　主事　　濱名　亜璃紗
［退職］
　主事　　日比野　美保

Facebookもご覧ください
最新の情報や季節の話題を、写真とともにお伝えしています。
http://www.facebook.com/HoppohmMuseum

北方民族博物館だより
No. 85

平成24（2012）年 6 月29日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http：//hoppohm.org
指定管理者
　財団法人北方文化振興協会